

## 晩年の犬養毅に関する一考察（Ⅱ） — 白林荘、孫文移柩式、政友会総裁 —

時任 英人

倉敷芸術科学大学産業科学技術学部

(2015年10月1日 受理)

### 5. 孫文の移柩式で蒋介石と面会

党の内外で田中義一首相に対する不評が大きくなるなか犬養は、1929（昭和4）年5月20日午後8時45分に東京駅を出発し、翌日午前11時神戸を上海に向けて出航した。南京で開催される孫文の移柩式に中国国民党から日本における「友人」として招待されたため、頭山満らと中国を訪れることになったからである。社会的には、当時田中首相が犬養に政府を代表して孫文の移柩式に出席してもらうことを検討していたようである。そのことを伝える新聞は〔註46〕

・・・我政府においても我国を代表して右式典〔移柩式〕に参列すべき特派使節の人選について過般来種々考慮を払つてゐるが田中首相としては我国と支那との国交の重要性に鑑みこの際是非共我国第一流の政治家にしてかつ故孫文氏とも深き関係のある有力な人物を特派したいとの意向を有し種々選考の結果現在の我国朝野を見渡して犬養毅氏を以て他に適當の人物はない固より氏の老体を煩はす事には多少の懸念はあるが日支国交の上に重大なる貢献をなすの意味において氏の出を懇請するの決意をなし最近目下富士見の別荘に静養中の犬養氏に対し人をもつてその内意を訊ねしめたとの事である、犬養氏からはまだ何等の回答はなくこゝ数日中に帰京の上正式の回答をなすはずになつてゐるとの事である

と政府側の考えを述べている。つづけて、これまでの犬養と孫文との関係についてふれ、承諾した場合には、政府代表か国民代表とするかについて、次のように書いている〔註47〕。

犬養氏としては故孫文氏とは氏の日本亡命中に多大の好意を寄せて種々の世話をなしたのみならずその後も孫氏の存命中終始かはらず極めて厚い親交のあつた間柄で個人としても氏の祭典には参列したい位の考へを有つてゐる程だから恐らくその健康にして許す限り老体をていしてその任に当る事となるであらうと思はれる、なお氏が特派使節たる事を承諾するにおいてその資格を政府の正式代表とするかまたは

国民代表といふが如き意味で半官的な使節となすかの点については今後各国との振り合ひ等を考慮して適當の方法をとる事となるであらう

この報道の直前、犬養は旅費と南京の暑さを心配していたが、世間の見方である田中政友会政権の使節として行くのではないかという考えを否定していた。したがって、この時点では参列するとすれば、少なくとも政府の使節としてではなく個人として行くことを決めていたようである。静養していた信州の白林荘から、古島一雄に対して、次のように述べていた [註 48]。

・・・支那ニハ行きたく思ひ居る也唯問題ハ旅費と六月の熱炎也新聞の如きハ聞違也田中〔義一首相〕より使を差向けしことハなし 行く事ニなれハ兄〔古島〕の同行ハ望所也 今の処十の八九迄ハ行く事ニなるべし 行くにしても政府の使節などハ真平也個人の遊として出懸る也

同月6日には、ついに行くことを決めたようで、「南京行を決定す但猶秘密也其訳ハウザウモゾウの同行を避けるが為め也萱野〔長知〕ハ同行の筈也」[註 49]と古島に報告している。また、個人として行くことにしていたが、同月14日犬養は、田中首相を訪れ、いろいろ打ち合わせをしたようで、その一つは上海までは個人の資格であるが、上海に上陸したのちは「日本代表者としての待遇を受くる」ことになった件について話し合ったのであろう。また国民政府側では、犬養が訪れるということをも「好感」をもって迎え、「蒋介石氏は故孫文氏の畏敬せる友人として又支那革命の同情者として犬養翁の参列を非常に喜び南京における翁の宿舎は総司令部内にある広壯な蒋介石氏の邸宅を当てることに決定してゐる」と、ある関係者は述べている [註 50]。このことから、今回の犬養の参列を国民政府側が如何に歓迎しているかが分かる。

この時期犬養が中国国民党の招待で中国に行くということになったため、同行を求める者たちがいたようである。その中の一人が政治行動を共にしてきた清水銀蔵である。清水の同行要請を、次のように丁寧断っている [註 51]。

・・・此度の支那行ハ支那巡回ニあらず六月一日の式(註 孫文移靈式)に列しソレが了れハ直ニ歸る筈也小生ハ私的旅行なれど従來の關係より蒋介石ガ其宅ニ宿せしむる筈ニ付多数を率ひて厄介ニなる事ハ差控へたき也・・・

清水君

已ニ隨行七人あり之ハ減員出来ぬ上ニ板野も頼み來り此等の人ハ南京にて他ニ宿泊せしむべきやと苦心中也 式場ニハ恐らく小生一人が列するなるべし列席もせずして南京ニ行き又直ニ歸るハ何の妙も無し

しかし結局は、清水には同行を認めたようである [註 52]。

近藤達見 [今回の旅行について細かい報告書を書いた人物] の同行ハ断りたれど是非ニと熱望ニ付同行する事ニ致したり 但上海ニ留りてよろしとの事 (先刻同行を承諾せり) 右に付兄ガ強ひて行きたき熱心なれば同行してもよし 但南京の蒋介石宅ニ大勢押し掛ける事ハ差控へたきニ付南京ニてハ同宿するを得ず近藤氏と同様上海ニ留ることニ致度 右の条件なれば同行して差支なし

また、かつて犬養を孫文に紹介した平山周には、「孫中山終に神ニ祭られ甚喜ハしき事ニ候此度ハ氣候ハ悪し且つ野次的同行十三人ニ上り歴遊ニ便ならず因て何処も素通りの筈御一笑可被下候小生の同行者ニハ非なれど尾崎豪傑 (註 罌堂実弟行昌氏) も出懸る趣ニ候」 [註 53] と述べて、今回の中国行を楽しみにしていることを窺える書簡を書いている。

この中国行は、党内の動きが落ち着く点を見極めるための時間を稼ぐことにもなるし、永年関係していた孫文への義理立てのためにも、そして蒋介石らと話す機会を通して中国国内の事情を、自ら確認することも目的であった。

そうした犬養の個人的目的があったため、次第に同行者が膨れ上がったことから、彼らが思わぬ発言や行動をした場合には、日中関係に重大な影響があるのではないかということに憂慮することになった。そうしたことを、大正中頃から西欧との外交問題で木堂のブレンとも言える存在であった、衆議院議員の植原悦二郎に吐露している [註 54]。

・・・此度の旅行の事が新聞ニ漏れし以来同行希望の申込多数にて過半ハ謝絶したれど終ニ予定以外ニ五人増加し今日迄にて十二人と相成候更ニ神戸長崎より増加する見込ニ候是でハ迎も歴訪ハ出来不申候困却の至御推察可被下尤も懸念ハ其連中が先方にて何を論談するや両国の感情ノ悪影響を与へざるやとソレのみ苦心致候宴会などで一杯機嫌で出鱈目ニシヤバラレハせぬかと心配ニ堪へず但し南京丈け用心すれば其余ハ心配も無るへきか御一笑可被下候

このような犬養の心配は杞憂に過ぎなかったようである。

さて、5月23日上海に到着した犬養は多数の出迎えを受け、国民政府から用意された富豪の別荘に入り、ここで上海市長から盛大な歓迎を受けた。翌日は、市庁、領事館を訪れるとともに、三田会、岡山県人会に出席したのに続いて、翌25・27両日には同文書院で講演会を行い、早稲田会、領事の招待会、日本人倶楽部の会合などにも出席した。

中国に到着すると直ちに、次のような声明文を発表した [註 55]。

自分は日本国民の一員として数十年来国民党の主義理想に対し甚大なる同情を有し

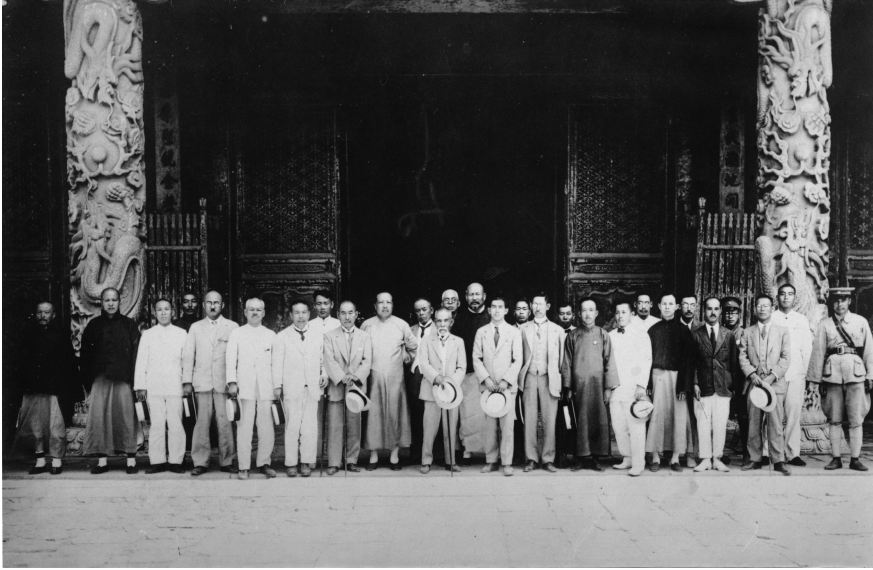


図6 1924年の訪中記念写真（中央が犬養）

故孫総理とは日本に於けるもつとも旧き友人の一人としてその最後の日まで同情と尊敬とをもつて友情を持続して来たものであるが故に今回の盛儀に列席するを得るはもつとも光栄かつ本懐とするところであつてこの点については頭山翁も全く同感である（中略）

元来故孫総理と日本との間には切つても切れぬ程の親密な関係があつたもので日本国民が均しく故孫総理及び国民党に対し陰に陽に同情し援助と同情とを惜まず、故孫総理が中華民国第一次大統領として渡日せられたときの如きは朝野を挙げて歓迎した次第であり故総理も又日本に対して常に友好親善の関係を持續することに努め日本においても多くの友人を持つてをられたことは周知の事実である・・・

従つて自分としてはかゝる大典の挙行せられるに際し既に日支間における幾多の懸案が円満に解決せられ両国間の友情関係は更に一段の親密を加へて来た事実を見て誠にきん快に堪へないのであつて故孫総理も定めて地下において満足に感じて居られる事と思ふが日支間にはいまだ幾多の懸案もありかつ将来為すべき事が多くある次第故我々はこの機会において虚心たん懐一意両国の親善関係の増進を念とし互に誠意を披れきして両国が一致して東洋の和平を保持し進んで世界の文化に貢献するやう努力したならば故孫総理の遺志にも適ふ事と思ふ

また、頭山満との共同の声明文で、次のように述べている〔註56〕

今度の渡支は年寄がお寺詣りに出かけて来たやうなもので政治的意味は何もない、孫文君とは永い交りであつたがその死去の際は葬儀に参列も出来ないで残念であつ

た、今度の機会に故人の霊を弔ひ得ることは本懐で孫君永眠の、ち同志の人々の努力によつて故人の遺業がかくの如く立派に完成された実況を見ることは誠に愉快である、目下は西北の時局多端の折であるから長居は無用と思ふから葬儀済み次第退却する心算で北支那へ回るかどうかはこの暑さだから考へ中だ

上海では [註 57]、多くの人々に歓迎をされるなか、26日には東亜同文書院で講演をしたが、珍しくここではまず頭山満が自説を踏まえて次のような講演をした [註 58]。

・・・此同文書院に就て学び仕事を仕様といふ学生諸氏の着眼精神見識は実に結構なる事であつて喜ばしい事である、どうぞ諸君に於ては諸先哲の意思を体して国家の爲めに身を致して研鑽し其磨き上げられたる大和魂及び其の学び得たる事を、国としては日本国、人としては日本人として至て親切に真日本人の味ひを何処迄も忘れぬ様にして、何れの国人と比べても立派なものであるといふ感じを持たしめ、之れに依て我国威を宣揚し各国に比して一番盛んであり人類共存共栄の主義を完うせなければならぬ・・・

つづいて登壇した犬養は、自説の「産業立国主義」について説明したが、その後の同院卒業生による歓迎会では、日貨排斥運動に対して「両国人とも根本に誤解」があり、「支那側の陋と共に吾の之におそるゝの甚だしき」ことについて「警醒」をならしたのにつづいて、居留地官民合同の歓迎会では「吾が維新当時と現在の支那とを比較して、其政情の安定に至る迄、敢て焦慮することなく沈着に大胆に其推移をまつべき」と述べ、邦人の「今後の発展」を希望して終わった [註 59]。

当初南京には、5月30日に着いて、6月1日に式を済ませたのち、2日に出発する予定であったが、南京政府が孫文の遺体が28日に南京に到着すると言ってきたので、犬養らはそれを迎えるために27日に南京に向うことになった。それゆえ27日早朝には南京に向けて出発し、同日午後4時前に南京に到着したのに続いて、翌日には北京から孫文の霊柩が到着したのを受けて告別式が開催され、犬養は「祭文」を朗読した。そして、犬養や頭山、それに犬養の息子の健らには特別の宿舎が提供されたということであるが、これが当初犬養がふれていた蒋介石の邸宅であったのであろうか。そして、29日には蒋介石が犬養らを訪れ、「遠路熊々奉安祭に参列の爲め来臨せられたる労を謝し雑談三十分程にて辞し」 [註 60] たということである。

6月1日には、孫文の霊柩が陵墓に送られたことにより、犬養らもそこに赴き、頭山満と共に陵墓に向って待っていると、そこに霊柩が到着し、輿に移された柩を遺族が先頭に立ってその綱を曳き [註 61]、350段の石段を登り、10時靈廟に着いた。そこで、「万余」の人々は、柩の左右の丘に配列され、七列の者たちが靈廟の中に入り、靈廟の後部にある

墓陵を遺族、蒋介石、犬養、それにイタリア大使たちが囲み、中華民国を守るようにと奉安された。つづいて2日の午後から、犬養や頭山を歓迎する会合が開催され、黄興の二人の息子（一欧と一中）も出席したが、その時の日本側と中国側を包む雰囲気は清水は、次のように報告している〔註62〕。

主客とも初めより国際的感念杯毛頭無之、なつかしさと、親みの漲れる、極めて情致に富む会合にて候ひき。黄一中の辞は、恩師を迎ふるが如く、木翁の之に対する、慈父の子弟に臨むが如きものあり、而も言外に其余香をふくむ処など、暗涙にむせばぬものは無之、蓋し今回の旅行中此会合位、感じを深からしめたるものなしと存候。革命は尚未だ成功せずと雖も、而も将に大業統一の緒につかんとし、今や其祖として孫中山は帝王も及ばざる待遇によりて、祭られんとす。其大業の基をなすに、之と譲らざる黄興の何等顧みられざるにおもひ至りて誰か涙なからんや。

此日の印象の深さは、小生等の一生を通じて忘るる能はざる処に候。

また、同盟会以来の人物たちによって組織された「巳己倶楽部」の茶話会にも犬養は出席したが、ここで宣伝部長である葉楚傖は、同盟会と犬養と頭山との関係について、孫文が日本に赴いた際に犬養と頭山のほかには「日本の同志」が「沢山尽力」してくれたと述べた。つづいて張継が第一革命の時に犬養が「袁世凱とは断じて妥協してはならぬ、若し妥協する様な事があつては革命の真精神を貫徹する事は出来ないぞ」と述べたのに対して、当時の革命派は「相済まぬ事」であり、これは犬養が革命派のために述べたのではなく「革命派と袁派と長く罅隙を生ぜしめ其機に乗じて日本の野心を逞うせんとする計略に外ならぬものであると考へて居つた者も」いたのであるが、「追々先生〔犬養〕の御忠言は事実が証明する様になつてまゐり先生の忠言が真に吾人の革命を成就さす所以であるといふ事が判つて漸く革命の曙光を見る事が出来る様になつて来たのであります、今にして当時を追回すると先生に対して誠に相済まぬ事で御詫の言葉を呈せねばならぬ」〔註63〕と言って謝罪したのである。確かに、辛亥革命に際して犬養が、袁世凱と妥協しないよう強く提言したため、革命派の新聞から批判されたことは事実である〔註64〕。

これに対して犬養は、革命当時に取り沙汰されたいろいろな「離間中傷等が随分」あり、数年後には当初革命派であったのにも関わらず、袁世凱支持に回った熊希齡の談話として新聞に掲載された「犬養は南北両断の意図を懐いて来たのであつた」という発言について、熊に直接問い合わせたところ「新聞の誤報」だと言われたが、このような「間違いは度々」あるとして寛大な態度を示した。つづいて、次のように述べた〔註65〕。

国家の間には時として衝突も免れず、併してそれがお互に其国の利益であるかどうかと云ふことは国民と国民との目から見て判断せねばならぬ、また国民相互の間

にも誤解が無いとも限らぬ、こんな場合には友人として互に意見を交換して見度い、そうして互に誤解が解けたならば国と国の利害の衝突等も案外容易に解決を見ることが出来るかも知れぬが自分は老齡隠退して居るから、政治の局面に立つて活動することは出来ないが、隠退して居るからと云つても此誤解を解くことには努めたいと思ふ、同盟会の諸君も誤解があつたであらう、又自分にもあつたらうと思ふ、併し国民と国民とは大局面の上から見て互に露骨に話し合つて意見を云ふ事が必要である、故に大局面の上から見る時には、同志の間には国境と云ふものが無い、それ故に吾輩は同盟会の諸君と昔から知り合つて居つたから遠慮無しによく意見を交換したのである、諸君も相変わらず胸襟を開いて話し合はれる事を望むのである、予は茲に同盟会の故人の努力に対して深く感謝し又現在の人々が東洋平和の爲めに奮闘せらるゝのを感謝致します。

辛亥革命に際して犬養が南北妥協を阻止する勧告をしたために批判され、帰国する時は上海の港に見送る者が誰もいなかったというほどであるから、その時の中国側の姿勢はその後犬養の心を悩ませたことであろう。しかし、19年後にこの場で当時の姿勢について詫びを入れられたことから、犬養の心は少しは癒されたかもしれない。

犬養につづいて犬養と孫文との間で連絡係をしたり、中国で自らの考えを実現するために活動していた萱野長知も挨拶し、革命の関係者や黄興のことに言及し、「私は最早何にも言はぬ、唯今日の人々に向つて革命当時の事を忘れたか真精神は没却して居らぬかと云ふ事を一言云ふて置きたい」〔註 66〕と述べた。

いよいよ3日の夜は、蒋介石の自邸に招待され、中国側からは胡漢民、戴天仇らの要人、張継らの旧同志らが集まると、蒋介石は「両先生〔犬養と頭山〕は故孫総理の友人であり我国革命の恩人であるから長く御滞京を願つて出来得るだけ歓待を申し上げたいのであるが、只今は内外多事の折柄として十分に其意を尽す事の出来ぬのは残念である、今夕は全く粗末ではあるが微衷の一端を致すのであるから是非緩々御話を願ひたい」と述べた。これを受けて犬養は「私は只中山先生の友人であつて友人として尽すべき事を尽したに過ぎない、尽したといふても要するに中山先生の境遇と自分の境遇とが丁度同じ様であつた為同情したに過ぎないのである、自分も多年政治上に活動して我国をして圧迫より免かれ、列強勢力の羈絆を脱せしめんと努めて居た事が、故中山先生と同じ境遇に置かれてあつたからである」〔註 67〕と挨拶した。また犬養はその「大業の緒につきしを祝すると共に、遠大なる理想は兎に角として、数千年の旧き歴史と経験と修練と文化をもつ支那の事なれば、之に新らしき理想を加へて、徐々に穩健なる發達を禱る」〔註 68〕とも述べたが、これは対日関係にそれなりの配慮を示すことを要請したものであった。

6月4日午前7時、犬養ら一行は張継、陳少白たちとともに、蒋介石や戴天仇を始めとする多くの日中関係者たちに見送られて、南京を出発し、鎮江を経て上海に到着した。こ



図7 1924年の訪中記念写真（青島博物館前。前列の右から古島一雄、犬養、頭山満、萱野長知）

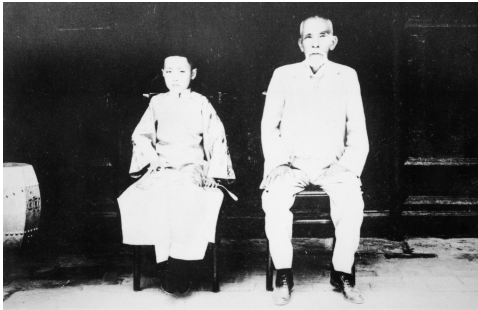


図8 1924年の訪中記念写真（孔子の子孫と）

ここで当時、犬養の長女の娘婿であった在中華民国公使の芳沢謙吉も合流した。8日には船で青島に向い、9日に到着し、地元の人々から歓迎を受けたのち、11日青島を出発し12日には済南に到着すると寝台車で泰安府に向い、泰安を見学したのち13日にはここを出発した。曲阜駅に着くと息子の健、古島、近藤、萱野らを伴い、中国側からはわざわざ南京から張継を始めとする要人や青島からも人々が同行して、直ちに聖廟と孔子の墓に詣で、孔子77世の子孫に面会し、その師範学校で講演をした。

師範学校での講演では、最初に師範学校の生徒たちの「任務」について触れたのち、孔子のことに言及した。つづいて今回の訪問で見聞したことを紹介しつつ、「旧物破壊、旧文明打倒の宣伝が熾んである。奇を喜び、新を競ふ為めに玉石俱に焚くと云ふ現状である」と指摘したのち、これは「最も憂ふべき事で、必ず他日大に悔ゆる」

時が来ると警告をし、次のような東洋と西洋の文明の比較を披歴した [註69]。

東洋文明と西洋文明とを比較するに、西洋の東洋に勝れるは、科学即ちサイエンスの発達である。其他は却て吾の優れるを信ず。例の孫中山の唱へられし三民主義の民生の如き、既に五千年前黄河流域に発達せし漢民族の唱へたる理想で、又長き年間之を実行せしもので、其实行研究の結果、理想と實際を適應せしめ、以て現在の文化を構成したもので、即ち前聖の効果を集めて大成せられしものが、孔夫子の大教である。

つづけて、「礼記の礼運篇の理想」は進歩を前提とするため、その極致は「道徳」・「智識」また「体力」から見てもすべての人間というものは、「各人平等」でなければならないというのが「大同世」であり、孫文の目標である「世界大同」も正にこのことであって、5千年前漢民族が試みた共産主義や無政府主義も「糟粕」にほかならないと指摘した。犬養は若い時から学んできた佐久間象山と同じような主張をし、中国において大昔は共産主義や無政府主義と同様な制度を実現していたとする考えを披歴した。そして、持論の道



徳論を次のように述べた [註 70]。

元来今日新を逐うて走れるものは、頻りに旧道徳を捨て、新道徳を唱ふるが、実は道徳の根本は万古を通じて不変である。道徳の行為は時代によりて変化するが、道徳の根元即ち道念を發する本は千古不変のもので、其源泉は一元である。一元は即ち中庸に云ふ未發の中で、維中至誠たり、維誠至極たりである。日本は維新以来熾に旧物の破壊を企て、今日尚ほ其弊に堪へぬが、幸に中堅の人士の間に此道念が保存されて居つたから、之が發しては国力の發展ともなり、文化の進展ともなり強国ともなつたのである。此道念、此根本は孔夫子の教に得たものである。

我等來りて中国の実情を見るに、思想の混乱は恰も大兎時代の洪水の如きもので、大聖の手を以て之を救ふに非ざれば、其の結果は寒心に堪へぬものがある。中国は誇るべき此五千年來の文化を有しながら、之を破壊せんとするは実に驚くべき事である。之を反省せしめる為に教育の大任にあたらるる諸君子に対して、いさゝか希望を述べて参考に供するのである。

このような「道徳」と「道念」の議論は、犬養にとって目新しいものではないが、この考えを犬養が若い頃から中国の教養から学び、そのことを、師範学校で述べたということに大いなる意義があると言って良いであろう。これは、ある意味では犬養の教養の里帰りとも言え、いつかは中国で講演したいと思っていたことの表れかもしれない。それほど中国の思想は犬養のアイデンティティともなっていたもので、当時世間に知れ渡っていた「東洋趣味の人」犬養木堂の真骨頂とでも言えるものの表現であった。

講演終了後、済南に戻った。そして、14日北京に向かい、15日に天津に到着したが、直ちに北京に向けて出発し、正午に到着した。帰路、犬養は済南で山東省政府主席に任命されたばかりの陳調元による歓迎会に出席し、陳の挨拶をうけて、「孫文と提携せし根本は、北アジア全体の白人の圧迫より脱せんとするに外ならず、・・・吾が東亜先哲の唱へし世界平和は、ウキルソンの国際連盟に先んずる事五百年、宋の横渠先生〔これは中国の北宋時代の儒学者である張載のこと〕は、為万世開太平と唱導せし事にて、日支互に努力以て此大目的を達せねばならぬ」[註 71] と述べた。

16日に北京に到着。翌17日、北京では故宮とその博物院を見学し、翌日からは北京の歴史的地区を時間をかけて見物していたが、22日には日中関係について次のような声明文を発表し、国民党に対する支持を明らかにした。その内容は、①国民政府は永続しその国の都は南京を動かさないこと、②蒋介石は現代支那の第一人者であり、この国の政權を維持することは日支双方の利益であること、③国民政府の財源は関税を第一とし関税増徴は同政府の死活問題であるから日本は相当考慮を払わなければならないこと、④日支通商条約改定に当っては平等互惠の精神を原則として努めて時勢に適應させなければならないこ

となど〔註72〕であった。このような発言は、ナショナリズムが高揚しつつある中国に独自に対応しようとしたため国際的に孤立しつつあった政友会の中国政策に対して、慎重な姿勢を求めることを目的としていた。

これ以降まだ天津から満州を「一巡」して朝鮮に立ち寄り、途中の大連で当時の滋賀県知事の今村正美に会う予定であったが、上海でマンゴを食したために腸を悪くしたことで妹の病状が「危険」になったため、旅程を変更して北京から帰国の途に就いた。

## 6. 政友会総裁に就任

6月28日、犬養の一行は、辛亥革命の時とは異なって「芳沢公使初め日支官民多数の見送りがあり、汽車は支那兵の棒銃軍楽隊の奏楽に送られて」盛大な歓呼のなか出発した。帰国の途上の船中で、張作霖が爆殺されたことについて虚偽の報告をしたことが原因で、田中内閣が総辞職をした報告をうけた。その時のことを、同行した近藤はつぎのように述べている〔註73〕。

船中にて田中内閣総辞職の電報を受取つた。其第一信は辞職の事みの通報なれば余りの唐突にて一行皆何故の辞職なりしやと評議取り取りであつた。其中に第二信第三信と通報があつたので詳細が判つて辞職に至る迄の顛末を知つた時には意外の感に打たれ我国憲政の前途の為に慨嘆した。

そして、7月3日に帰宅した。帰国して間もなく犬養は、先述した今村に対して「内閣の頓死ニハ一驚を喫したり是より政界多事と被存候専此ニ覆謝並暑安を禱候」〔註74〕と述べている。この件については、神戸に着くなり感想を求められ、「総辞職のことは二十八日船中で知つた、隠居のわしには何の用事もない、総辞職と、もに総裁の更迭をやるつて？そんな馬鹿なことがあるものか、そんなことをいつてあるときぢやないぢやないか、小泉（策）が第三党を組織するつて？そんなに団子をこね上げるやうにうまくゆくものか」〔註75〕と述べたが、むろん犬養は、中国に滞在していた時も政友会のことが最大の関心事であったことは言うまでもない。帰国して暫くすると、政友会総裁の田中義一が突然死去したため、犬養にその後継総裁に就任するよう要請されることになるのである〔註76〕。

実は、田中政権の評判が悪くなると、犬養を担ぎ出そうとするいくつかの動きがあった。まず、小川平吉鉄道大臣が鉄道疑獄事件で検挙される以前に、政革合同に際して政友会側で犬養の革新倶楽部との合同を工作した小泉策太郎が古島を訪れて、「田中〔義一〕では到底駄目だから次に小川を総裁にしようと思ふが、それには時季が早い。」そこで「暫定的に犬養にやって貰ひたい」〔註77〕ということであった。詳しくは、こう述べた〔註78〕。

どうも政友会はいかん、あゝして床次〔竹二郎—この年の7月に政友会に復党〕と鈴木〔喜三郎〕と争つてゐては、又政友会が二つに分かれてしまふ、一時、外のものを持つて来るより仕方がない。望月(圭介)もダメだし、オガ平(小川平吉)ちや貫禄が足らぬ。貫禄のつく間、犬養に暫定的に総裁をやつて貰ひ度いのだ

そのことを聞いた古島は、「冗談ぢやない。犬養はやつと落着いて、富士見でいゝ気持ちで居るんだ。そいつを山から引きずり下ろすなんて、ソんな不人情なことはイヤだ。断じて反対する」〔註79〕と、言下に断つた。すると、今度は、政友会の内田信也が古島を訪れて、元老の西園寺公望に面会したとき田中に対する信頼が薄いと分かったため、何としても田中を辞めさせたいということ話し、次のように述べた〔註80〕。

西園寺〔公望〕公の脈を引きにいつたが、田中が罷めぬダメだ。中橋〔徳五郎〕と思つたけれども之もダメだ、鈴木床次ぢや争ひになるからダメだし、どうしても政友会には今人が無い。ソコで鈴木と床次に言つたんだ。“君達が争へば結局共倒れになる。だから暫定的に第三者を持つて来るより仕方がない。ソレには犬養より外に無い、君達二人で犬養を推せ”と、そして二人に承諾させて来たのだ

と言うため、この時も古島は「オレは絶対に反対だ、そんなことをするなら打ちこわしてやる」と述べると、内田は真剣な顔で「それだけは勘忍して呉れ、折角此処まで来たのだから・・・俺が今日此処に来たことも秘密にして呉れ」と述べるため、古島は「オレはひとのことを発いたりなんかしやせん。貴様のやることを妨げもしないが、オレはイヤだから引受けもしない」と言ったという〔註81〕。

最も犬養の心情を理解している古島は、政友会との合同に参加した犬養派の若い政治家たちに対して政界を隠退する形で合同した責任を取ったことを理解していたし、それに、それまで約35年間に及ぶ政界での活動によって積み重なった疲労も取るつもりで犬養が、富士見に別荘をつくつて休養していたことも分かっていた。古島は日清戦争後に九州に赴任する前後から犬養を慕い、人生の重要なことを相談してきており、そうした信頼は日露戦争後から本格的に犬養を自分のアイデンティティとまで考えて、政界での重要な交渉事を一手に引き受け、また重要な局面ではアドバイスまでしていたほどであるから、犬養を知り尽くしていたのである。それゆえ、犬養の心労や肉体的疲労も十分理解した上で、犬養の「側近中の側近」の役割を果たしていたため、ある意味では犬養の分身とさえ言つても良いほどであった。それゆえ、心底から犬養を休ませたかったのである。それを簡単に「暫定総裁」として引つ張り出すということは、断じて出来ないことであった。

また今回は政友会が党内勢力の抗争を一時的に繕うために、犬養を引つ張り出すという発想が許せなかった。つまり、どうせ犬養を引き出すのであれば、永年温めてきた政治的

理想を時間をかけて実現するために期間を設けず働かせたかったからである。そうでないと、犬養が引き受けるはずもないと確信していたのである。したがって、古島にしてみると怒るのは当然であった。

しかしながら、古島の反対にも関わらず内田を始めとする政友会の首脳は、活動を辞めず、党内を説得して回ったようである。内田は、こう述べている [註 82]。

・・・当時の党〔政友会〕内は鈴木喜三郎と床次竹二郎氏の対立が激しかったから、これを制御するためには、どうしても犬養翁を引張り出す以外に途がなかった。かくして僕の犬養翁担ぎ出しの運動は開始されたのである。〔省略〕

この決意なるや僕は、その富士見に引籠っていた犬養木堂翁に出京を促し、犬養邸での会見の結果は田中総裁問題に対して、木堂翁も僕と同意見であつたから、大いに意を強くした。それではというので予定通り、『憲政擁護のため是非、田中総裁の後を襲つて総裁を引き受けて下さい』と、翁の蹶起を慫慂したわけであるが、いつか僕の話に熱が入り、卓を叩いて大きな声を張りあげる、すると隣室におられた奥さんが『内田さん、声が大きいわよ』と度々注意をされた程であった。こうやってどうやら木堂翁に、『俺は知つての通り貧乏だから、もし金があれば引受けてやつてもいい』といわせることが出来た。結局、金は山本丈太郎氏の力を借りることゝし、また犬養翁の参謀長である古島一雄氏とも密談してその共鳴を得、犬養翁担ぎ出し運動はいよいよ本格的に進行して行つたのであるが、一日富士見に戻っていた犬養翁が散策中、倒れて重傷を負つたという報道が大々的に行われた。僕が大いに慌て、富士見に容態を問い合わせると、何のことはない、たゞつまずいて倒れたというだけだ。そこで『尻餅で天下ゆるがす親爺かな』と駄句つて見舞電報を打つたことがある。こうした裏幕を演じつゝある最中、突然、田中総裁急逝の報が入つたのである。

この当時、新聞で犬養が大怪我をしたとの報道があつた（実際は軽い怪我）のが8月23日 [註 83] であるから、内田はすでにそれ以前から犬養を担出す計画を進めていたことになる。そうしたさ中の9月29日早朝に田中が突然死去した。すぐに後任を決める時に、いよいよ床次派と鈴木派 [註 84] が本格的に抗争を始めたため、結局岡崎邦輔と望月圭介、それに内田自身も床次を説得し、鳩山一郎と森格が鈴木をなだめた結果、犬養が後任と決まつたのである。それ以前に犬養を暫定総裁にという政友会内の伝聞が流れていたことを「あんなへま」と言つた岡崎邦輔は、7日に「政友会の中では犬養君がたれよりも世間受けはよいし言論機関にも青年にも通りはよい、だから身体の話は別にすればもちろん同君が一番よい」 [註 85] と述べた。

また、内田は、党の長老の一人である高橋是清にも相談したが、すると高橋は「それは

そうだよ、鈴木なんていう所へやっちゃ駄目だ、陸軍とくつついちゃって又陸軍内閣になっちゃうからいかん、犬養の方がいい、昔政友会と国民党とはやり合ってたけれども、しかしそれは同じ政党の中の争いだ、軍閥に多年築いて来たこの政党内閣をメチャメチャにされてはいかん」[註 86] と言って、犬養を引き出す案に賛成したという。実際、犬養は大正時代になると政友会との合同を目論み、いろいろ画策していたが、老獪な原敬が相手では容易に実現しなかったという経緯があったのである。

この時犬養総裁の元での資金については、西園寺公望の秘書の原田熊雄は、内田からの話をメモしており、この中で「内田〔信也〕氏 犬養、金は慶應（交詢社）。武藤山治も金を出す。慶應は初めての首相。鈴木のために出す金と一所にすれば、床次より多くなる。」[註 87] と記すほどであるから、資金に関する計画も出来上がっていたものと思われる。10月7日、このことを決定した政友会の長老会議が開催された高橋是清邸での話し合いについて、政治評論家の馬場恒吾が次のように報告している [註 88]。

田中義一が死んだ後に急に政友会総裁の後任を決める必要があつた。政友会の長老会議が赤坂の高橋是清邸に開かれた。其前に政友会幹部の意向は犬養老を総裁に推す事に大体決定してゐたが、鈴木喜三郎、床次竹二郎両氏が快く同意するであらうか否かゞ疑問とされた。尤も鈴木は最初から犬養勲を標榜してゐた。犬養を推す事が、臆て自分が総裁になる前提だと思つた。だから此長老会議の席上で床次が最初に犬養を推す事に口を切つたならば、如何に全般の空気が和やかになるであらうと思はれた。鈴木、久原などは犬養賛成の説を述べた。床次は黙つてゐる。最後迄黙つてる様子であつた。空気が陰鬱になつて来た。それを見兼ねた岡崎邦輔が床次を呼び出して、今は大勢が犬養に決してゐる。こゝで一言賛成の意を表すべきだと云ふ事を耳打ちした。それで床次が最後に犬養推戴に賛成する意味を述べて、犬養説が決定した。

さすが馬場である。当時において政界に関する評論を書いていた一人であり、犬養については政界での位置とその心中をうまく描いた人物はいないと言って良いほどであった。

馬場は、これに続いて次のように述べている。犬養が総裁になったことで、大政友会が「小成友会」になるひとつの転機が含まれているが、その理由は犬養の政治的生涯の「大部分」は政友会に反対の立場で、政友会は「団体は大きいけれども、政策はない」ため、党を政策で「引曳り廻す事は容易である」と見たがゆえに総裁に推されると、これを引き受け、田中義一が「残した大政友会に依つて彼れの政策を行はんとする」と指摘したのち、政友会と犬養の考えが異なることでどんなことになるかについて、次のように指摘した [註 89]。

だが茲に矛盾が存在する。前にも云つた如く政党を大きくすることと、政策を行ふ事は別物である。党が大きくなるためには無主義、無節操で、只党を大きくする事のみを考へるのがよく、なまじつか政策を行はんとすれば、党が小さくなる許りである。だが犬養は党は小さくなつても、政策を行ふ方を選んだ。今より二十年前、犬養等の属する憲政本党が改革派、非改革派の争ひを起した時犬養は非改革派に属してゐた。之れに対して大石正巳の改革派があつた。改革派の主張は憲政本党が斯の如く多年悲境にあつてはやり切れない。それと云ふが八釜しい主義主張に囚はれ過ぎるからだ。寧ろ度量を大きくして、門戸を開放するに如かずと云ふ説であつた。其胸中には政権と妥協せんとする意志が動いてゐた。之れに反対して犬養はいつ迄も孤塁を守らんとする態度に出た。世間は彼れの壮烈なる意気に同情した。併し彼れの党派は段々に細つて行く許りであつた。日本の社会情勢の罪であるかは知らぬが、事実としては党は無主義で肥り、主義主張に忠実で細つた。犬養は二十年前の経験を繰り返さんとするかの如く、今日も亦政友会を政策で統御せんとする。



図9 1924年総裁受諾に際して森幹事長と

恐らく犬養は、馬場が指摘した通りの様な心境に近かつたのではあるまいか。政策を抜きにしては、犬養の本領はなくなり、犬養が最も嫌つた単なる権力に対する欲望だけになってしまうからだ。

さて、10月7日の高橋邸の会合では、初めのうちは二、三日決めずに「考慮」しようとする意見が出され、高橋も指名する

ことをしなかつたが、先述した馬場の証言のように犬養と決した。そこで、ついに幹事長の森が正式に犬養に依頼するために、湯河原に赴くことになったという内容の電話を内田が古島にしてきたため、古島は森と次のような会話を交わした〔註90〕。

其晩、森格が私に電話をかけて来て「いよゝ決めた。これから、犬養のところに行くんだが、一緒に行つて呉れ」と言ふから「それはイヤだ、たゞ貴様に言つて置くが、犬養といふ男は、大きな鐘みたいなので、鳴らし方に依つて、どうにでも鳴る。貴様、一生懸命になつて、正直に打ち明けるそしてドコまで彼れを納得さすかといふことだ。オレの行く必要はない。貴様の肚一つだ」と言つてやつた。森は其晩直ぐ犬養のところへ行つた。

犬養は夏、富士見の山荘内を逍遥中、怪我をして湯河原の温泉に行つていた。翌日、私が行つて見ると、森は喜んでゐた「承知して呉れた」と言つてね。

10月8日、森は7日夜の決議に基づき湯河原の犬養を訪れ総裁に就任することを求めると、犬養は快諾したという。その後、犬養は次のような話をした〔註91〕。

党の諸君は恐らく自分を買ひかぶつてゐるのであらう、自分は党の諸君が期待するやうには働けられるとは思つてゐない、然し政党政治は常に一種の戦ひである、もし党の現状において自分がこの老体を提して出ることが大局の上から必要であるといふことであれば自分も政友会の一党員として党のために最善を尽すべき大なる義務と責任があるのだからこの際謹んでお引受けしよう

そして、12日の臨時党大会で高橋是清から指名され、正式に総裁と決したのである。

その前後、内田は京都にいた西園寺の考えを探ろうとして赴いた。これは、党内の久原房之助が西園寺公望に何らかの工作をするのではないかと推測したため、先手を打とうとしたからであった。そこで、西園寺に田中の後任に鈴木か床次のどちらが就任しても党が「割れ」るので、就任を「慫慂」した犬養から「公爵の御意見を聞いて来い」と支持されたので来させていただいた、と述べた。ところが、このことを聞いた西園寺は犬養が政治的経歴を始めてから常に元老を批判し、ついには元老制度を廃止することを主張していたため、内田に厳しい表情をした。内田によると、次のようであった〔註92〕。

実は犬養翁がかねてから元老制度廃止論の急先鋒で、園公〔西園寺〕とは疎遠であつた関係上、僕が話にち四つと色をつけて、いかにも犬養翁が園公を尊重しているような含みをもたせたわけだ。ところがいけない、園公はキツといずまいを正して『犬養、何ですか！ 常に元老廃止の先頭に立つクセにこの期に及んで私の意見を求めるとは・・・』とばかり開き直ってしまった。

僕はしまったッ、藪蛇に終つたかと冷汗三斗の思いであつたが、突嗟に『いや犬養氏の御挨拶は「元老」に対してではなく、『前政友会総裁』としての老公に対する敬意の表れで、全く他意ないものです』と告げた。園公はこれを聞くと『内田うまく逃げたぞ』といった表情で、その後は追及せられず、この問題も無事落着をみて、安堵のうちに帰京した。

犬養が元老制度を一貫して批判してきたことは、夙に社会的にも知られており、このことを犬養は、とくに大正時代には演説や政治的記事を書く時は必ず言及していた。それゆえ、民党系のジャーナリズムにもこの点は支持されており、支持者もよく分かっていたため、あのような熱狂的な支持をした理由の一つともなっていた。

9月29日に田中が死去したが、先述したようにそれ以前に犬養は内田から総裁就任の要請を受けていた。しかしこれは極秘にされており、したがって田中が死去するとその後



図 10 政友会の幹部と

一笑可被下葬式(註 田中前総裁)を済ませて温泉ニ参る筈ニ候・・・」と記して、全く総裁に就任する考えはないと応えていた[註93]。おそらくこの時期犬養は、政友会内で総裁問題がどのように決着するかを見定めていたため、このような内容にならざるを得なかったであろう。それゆえ、温泉での病気の治療をするとともに、正式に要請があるまで湯河原温泉で待つことにしたのであろう。

それが正式に森恪に就任を要請されて受諾すると、長野県の北信木堂会の顧問の人物に対して就任の件について、「黨員たる以上ハ党の大多数より求められ而かも党の危急ニ当りてハ辞する理由ハなき訳也されと一身上より云へは一旦隠遁したる老軀を提けて難局ニ当れハ命ハ慥に短縮する是も亦不得已也」[註94]と記して、決意を述べた。また翌10月12日に党の臨時大会で正式に政友会の第6代総裁に推戴されると、富山県における以前の同僚に「小生も往年辞官と同時ニ政界退隱の意を決したる以来名儀丈けハ議員なれど全く政治の關係を絶ち居たる処此度ハ種々の事情より終ニ出廬致候もの、所謂強弩の末勢逆も世の期望ニ副ふことハ出来申間敷唯近來の政界の状態でハ憲政の効果を挙ぐるること甚難しと存候に付衰老の身にて何事も出来ぬか知らざれど力の能ふ限りハ君国ニ貢献致度、微意を以て蹶起致候次第ニ候」[註95]との決意を示した。そして、その2日後には、森幹事長に対して大会での演説の草稿を送ったのにつづいて、同年の年の瀬も迫った12月に、全国の黨員に対して次のような文章を送った[註96]。

・・・老生曩きに政界退隱の決心を声明致候以來適當の後継者を得て之を推薦致度と常々苦心致候際料らず政友会総裁を喪ひ終に党衆の要求ニ応して其後任と相也候付てハ初志を翻して再び政界に奔走する身と相成り爾來老軀を挺けて激務ニ没頭致居候目下焦眉の急としてハ金解禁并消費節約の結果たる慘烈深酷の不景氣ニ対する救済と政界浄化とに力を用ひ又根本政策としてハ産業立国並地方分権等諸案を具体化して其実施を謀る為めニ余命を捧けたき微意を以て曩日声明したる政界退隱の事を取消し奮て國家ニ貢献致候決心ニ候間此意御諒察可被下候

この書簡には、政界を隠退してから今回の政友会の総裁を引き受けるまでの心中が述べら

任になるよう蹶起を促す支持者たちがいたようである。例えば、犬養の長年の支持者でこの際蹶起するように要請してきたのが、当時の文明批評家であった高島米峰であった。これに対して犬養は、「・・・突然の事変にて困入候林下の遯叟引出し論にて尤も困却中誰か適當のものをと苦心中に候 一旦山に入りしより万事懶く相也候御



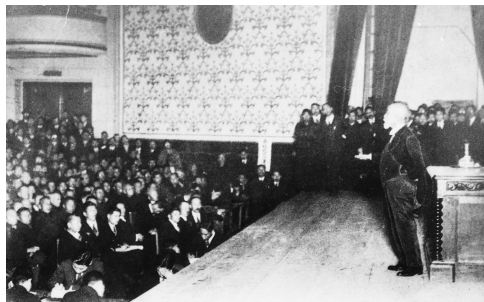


図 11 1924 年総裁受諾後の獅子吼

れている。

こうした一連の経過を良く知る古島は、のちに犬養の総裁就任のシナリオを古島が書いたという噂が出たことについて反論をしている。つまり、犬養は政友会と同じ考えであるため総裁に就任しようと考え、筋書きの元に動いたということは「飛んでもない話」であり、田中が急死したことから、

後継総裁を選ぶ過程で床次と鈴木が抗争を始めたために「お鉢が犬養に廻つたもので、田中が死ななければ、アンナことにはならなかったであらう」と述べている。つづけて、そもそも革新倶楽部が政友会と合同したことについては「毀誉褒貶が甚だしく」、極端な噂は犬養と古島が、田中から金を出させて「身売り」をしたという噂さえ出た。

そのような時に小泉が、次のように述べたという [註 97]。

アノ合同の最後の取引は、君と僕とでやつたのだから、金銭関係の無いことは僕が一番よく知つてゐる。ソレなのに、世の中には飛んだ噂を立てる奴もあるものだと思つてゐた。ところが此頃になつて、僕の知らぬ間に田中から金を取つた奴のあつたことが判かつた。僕は爾来其男と絶交した

実際、犬養と古島、それに小泉が金を引き出させたというのであれば、悪く言われることも当然と言えようが、彼らはそうではなかったため不愉快極まりないということであった。

確かに古島は犬養の了解のもとに政友会との合同をしたのであり、その経過の中で金が犬養側に動いたということを示す証拠を筆者は未見である。合同は、あくまで革新倶楽部の政治家の生き残りを考えて工作したものであるため、そのような資金自体を必要としなかった。いろいろ工面した金で白林荘をやつとの思いで手に入れたのであるから、隠退した犬養と古島にもう資金は必要ではなかったのである。

しかし、犬養は、政界の表舞台から消えた後に、政界の表舞台の頂上に就くことになろうとは、まことに皮肉の事態である。

## おわりに

犬養にしてみると、一度隠退して休養する場所を信州の山中と決めて、そこで晩年を過ごしている時に、大政党の総裁に就任することを求められた時、一体どう思ったであろうか。先述したように犬養をもっともよく知る古島は、隠退によって犬養は権力の中枢に位置する政友会の総裁になるなど、考えてもいなかったと述べているが、果たして実際はど

うであったろうか。

犬養が政革合同するに際しての正当化の根拠は普通選挙法の成立であったが、それにより1928年2月20日に最初の普通選挙が行われて、かろうじて政友会が何とか第一党になった。これで一応政友会は政権に就くことは出来たのであるが、このことよりも古島が憂慮したのは、この選挙であまりにも多くの金が使われたことである。これは予想していたとは言え、その金額に驚くとともにショックを受けたようである。このことは犬養も同様であったようで、それについて古島は犬養に、次のように述べた〔註98〕。

普選といふものが、こんなに金がかゝるものとは想はなかつた。之れは国民を教育せずにやつたから、こんな金のかゝる馬鹿々々しい選挙になつたのだと思ふ。だから貴方は、晩年を青年の指導に当つて下さい。尚ほ幸ひに健康が許すならば、中国問題の解決にも尽力して頂き度い。此の二つを貴方の一生涯の仕事にして下さい。貴方がそのお気持ちならば、私に於ても及ばずながらお手伝へ致しませう

この古島の考えに犬養は「同感」だったので、その心中はやはり驚きだったということであろう。したがって、機会があれば犬養も新たな有権者となる青年たちの教育に取り組んだようだが、やはり時間が空けば富士見で過ごす機会は多かった。富士見で春から秋までの多くの時間を過ごし、政友会の長老として党で会合がある時は上京したが、そのほかの場合には要請があれば講演をし、青年たちに普通選挙に関する説明をしていたようである。そして中国問題については表には出ずに、亡命客たちを匿ったりしていた。しかしながら、この前後も快適な別荘生活からは離れようとはしなかった。

このことから判断すると、犬養は、自らの権力に対する野心を捨て去ってしまったように見える。眼に入れても痛くないほど溺愛した孫の道子さえいれば、それで十分みたいな日々を送っていたのであるから、側近の古島でさえ、こうした日々こそ犬養が余生を過ごすのに満足していたと思っても不思議ではない。

では、これらの一連の経緯から当時の犬養の心境はどのようであったであろうか。政界を隠退したものの、そのことを地元有権者に取り消され、再度国会に議席を置くことになったが、その動きからは犬養の権力に対する野心などを窺うことは出来なかった。富士見の白林荘で多くの時間を孫の道子と過ごし、モンペ姿で庭の草を採ったり植木の手入れをしたりする姿からは、とてもではないが犬養の政治的野心など見て取ることは出来ない。

ところが、その生涯の多くを政治行動に費やしてきた日々は、隠退によって一時的には犬養の心を休ませたかもしれないが、日本政界の政治的事件や政友会内の動きは次第に犬養の心中を揺さぶり始めたのではあるまいか。しかも、肝心の総裁である田中の評判が極めて悪い上に犬養の考えとは異なる中国政策を実行することから、ますます批判的な考え

をもち始めたことは想像に難くない。つまり、中央政界の方から犬養に歩み寄り始め、次第に引きずり込もうとしたが、その際犬養は自らを「暫定総裁」として必要としていることが分かっても、そのことに違和感を感じたものの拒否はしなかったようである。問題は、資金のことだけであったようだ。これも解決できるのであれば、政治家として永年考えてきた自分の理想を政策として実現するために政友会の総裁になろうと考えたのであろう。時代は、まさに金融界の混乱や中国で国民党と日本との対立が表立とうとしていたさ中であるため、犬養の考える産業立国主義と中国との経済結合を実現するチャンスと考えたのである。つまり、犬養の政治的意欲は枯れてはおらず、逆に火が付いたのであろう。隠退に際して述べた言葉である「政治に生きて政治に死ぬ」[註 99]ということが頭の中を駆け巡り始めたのではあるまいか。

このように考えると、信州富士見の別荘白林荘は、一時的な隠れ場所で、そこで孫の道子と過ごす時間は実は極めて意味のあることとなる。つまり、道子の相手をする中で、次の政治的局面が訪れるまでの暫しの安息の時であったからである。長年の政治活動の中で当面は面倒を見る必然性のある政治家はいなくなり、したがって彼らのための資金稼ぎも必要がなくなり、ゆっくり心を鎮め、中央政界の情勢を見極めるだけで良かったからである。

また信州では植木をいじり、畑に鋤をいれ、草をむしって過ごすため、モンペ姿の「上等な植木屋」[註 100]と孫の道子には見えたほどりラックスした日々であった。しかしながら、頭の中はいつも中央政界のことでいっぱいであったはずである。

また孫文の移柩祭に国賓待遇で招待されたため頭山満とともに中国を訪れ、蒋介石とも言葉を交わした。この前年の6月には張作霖爆殺事件が勃発していたこともあって、次第に緊張しつつある日中関係を、何とかしなければならぬと決意していたかもしれない。

初当選以来つねに野党勢力の中心的人物の一人として政界で活動し、話題性のある政界の動きにはいつも関わってきた木堂にしてみると、政界との関係を完全に断ち切ることは苦痛でさえあったように思われる。というのは、衆議院に議席があればこそ、才能と頭脳、それらに基づく行動力とで「政界の寵児」のような生涯を送ってきたという自負心を満足させることができるし、さらに近代日本の政治体制の安定と改革に関与できるからである。

犬養は国会議員に初当選して以来、あまり権力に対しては野心をむき出しにしなかったが、政治的事件が頻発する中で、自らが所属する政党の内部が権力を巡って揺らぎ始めると、次第にその中心部分で大いなる存在になろうと思ったのは事実である。しかし、それも当初は政界の表舞台には出ず、ひたすら政界の裏面で活動する方を選んだ。これは裏方に徹することで政界での展望がもて、自分の進むべき方向を見定めることができると判断していたからであろう。

日露戦争後から党内抗争を契機として国民党系のジャーナリズムに支持され、側近の古島

一雄とともに政界の話題を集めるようになった。そのピークが第一次憲政擁護運動に際してである。パートナーは明治十年代に大隈重信の傘下に入って以来ともに活動してきた尾崎行雄である。

その後も犬養は、政界の中で独自の地位を占めてきた。そして、自らの政党である革新倶楽部を政友会と合同させ、それを契機として政界から隠退したのである。しかしながら、それまで日本の近代を生きるなかで共有してきた国家に貢献しているという意識を簡単に放擲出来るはずもない。再選のために活動した地元の支持者たちも犬養と同じ考えであったかもしれない。

こう考えると、犬養も彼ら支持者たちの想いである日本という国家を共有しているという意識をそれで断ち切る訳にはいかなかったのではあるまいか。しかしながら、あれほど大々的に政革合同をした直後に面の皮を厚くして、政界に居座ることはできなかったゆえに、一応政治の中心地である東京から離れた信州の別荘に引きこもる必要があった。その意味でも、富士見の別荘の存在は、晩年の犬養にとって重要な意義を有していたと言えよう。

そのような時に政友会総裁の田中義一が急逝した直後に、当時の幹事長・森恪が総裁への就任を要請し、しかも政治資金は関係者たちが何とかするというのであれば、「渡りに船」とでもいえる心境になったのではあるまいか。それに「政治に生きて政治に死ぬ」という決意でいたからこそ、直ちに反応できたのだと思われる。

## 註

- 46) 「新支那の大典に際し犬養毅氏特派されん 来月一日故孫文氏の移柩祭に首相特に出馬懇請」(『東京朝日新聞』1929〔昭和4〕年5月4日付)。
- 47) 同上、同記事。
- 48) 古島一雄宛犬養毅書簡、1929年5月2日付、前掲書『木堂書簡集』510-511頁。
- 49) 古島一雄宛犬養毅書簡、1929年5月6日付、同上書、511頁。
- 50) 「蔣氏の邸宅を宿舍に当つ」(『東京朝日新聞』1929年5月15日付)。
- 51) 清水銀蔵宛犬養毅書簡、1929年5月10日付、前掲書『木堂書簡集』、514頁。
- 52) 清水銀蔵宛犬養毅書簡、1929年5月14日付、同上書簡、515頁。
- 53) 平山周宛犬養毅書簡、1929年5月18日付、前掲書『木堂書簡集』、515頁。
- 54) 植原悦二郎宛犬養毅書簡、1929年5月19日付、同上書、516頁。
- 55) 「切つても切れぬ孫君と日本の関係 両国一致こそその遺志に適ふ 犬養氏のステートメント」(『東京朝日新聞』1929年5月24日付)。また、以下にも掲載されているが、表記以外は殆ど同じ内容である(犬養毅「日本に於ける最も旧き友人として」『木堂雑誌』第6巻第8号、7-8頁)。
- 56) 「犬養、頭山両氏上海に着く 支那側の盛んなる歓迎を受けて」(『東京朝日新聞』1929年5月24日付)。
- 57) ここでの記述は、清水銀蔵「木堂先生隋遊記」(同上誌、同号、5-25頁)、近藤達見『孫文移靈祭の記 附一新支那旅行記』(非売品、1929年)に依拠しているが、一行の動きについては一致してはいるものの、犬養の発言については表記や文章が微妙に異なっている。しかし、意味は同じであるため、内容によってはそれぞれから引用した。

- 58) 近藤達児, 同上書, 20-21 頁.
- 59) 清水銀蔵, 前掲, 8 頁.
- 60) 近藤達児, 前掲書, 33 頁.
- 61) 清水銀蔵, 前掲, 同頁.
- 62) 同上, 9 頁. なおこの時犬養の二男の健は, 革命前期の頃孫文の協力者である陳白(字・少白)と, 中山陵の岡野麓から中腹まで, 汗まみれになって柩の綱を曳いた. また, この時 30 年ぶりで健を見つけると陳は, 「会葬者の人ごみの中を縫って近づいて来た. そして西洋人がするように両手をひろげて「私(マ)の(イ)息子(サン)」と英語で呼びかけ, 私の肩を抱きしめて涙を流した」ということであったが, この時の若い国民政府の接待委員は陳白の歴を知らなかったので, 無視されていた, ということである(犬養健『揚子江は今も流れている』文芸春秋新社, 1960 年, 31 頁). 健は, 子供の頃自宅に出入りする孫文の膝に乗り, 広東土産の蓮の実の砂糖漬を食べさせて貰うのがたのしみだった, ということである(同上書, 30 頁).
- 63) 近藤達児, 前掲書, 45 頁.
- 64) 拙著『犬養毅—リベラリズムとナショナリズムの相剋』(論創社, 1991 年) 105 頁.
- 65) 近藤達児, 前掲書, 46-48 頁.
- 66) 同上書, 48-49 頁.
- 67) 同上書, 57 頁.
- 68) 清水銀蔵, 前掲, 9-10 頁.
- 69) 同上, 前掲, 17 頁.
- 70) 同上, 18 頁. このような「道徳」と「道念」に関する議論は, それまでも論じており, 例えば本論文(1)の脚注 7 の『木堂談叢』にある「道徳の修養」(1-19 頁)で言及されている.
- 71) 同上, 16 頁.
- 72) 「新支那に対する犬養氏の意見 帰京後首相に建言か」(『東京日日新聞』1929 年 6 月 23 日付).
- 73) 近藤達児, 前掲書, 154-155 頁.
- 74) 今村正美宛犬養毅書簡, 1929 年 7 月 5 日付, 『木堂書簡集』, 517 頁.
- 75) 「折りも折り木堂翁帰る 盛んな出迎えをうけてけさ神戸着, 東上」(『大阪朝日新聞』1929 年 7 月 3 日付).
- 76) 政友会総裁に選ばれる犬養に対する一連の動きについては, 伊藤隆『昭和初期政治史研究』(東京大学出版会, 1969 年, 217-221 頁), 升味準之輔『日本政治研究叢書 1 日本政党史論』第 5 卷(東京大学出版会, 1979 年, 173-177 頁)が詳しく説明しているが, 本論文の記述はこれらの研究に依拠している.
- 77) 山浦貫一『森格』下巻(高山書院, 1943 年) 657 頁の古島の談話.
- 78) 古島一雄「政友会の総裁争ひ」(古一念会編, 前掲書『古島一雄 全』所収, 1949 年) 949 頁.
- 79) 同上書, 同頁.
- 80) 同上書, 949-950 頁.
- 81) 同上書, 950 頁.
- 82) 内田信也『風雪五十年』(実業の日本社, 1951 年) 116-117 頁.
- 83) 「富士見別荘で木堂翁負傷 散歩中ガケから墜落」(『東京朝日新聞』1929 年 8 月 23 日付).
- 84) 鈴木派は, 森格や鳩山一郎ら行動力のあるグループであったが, 犬養はこの鈴木派に支えられていた(李武嘉也・武田知己『日本政党史』吉川弘文館, 2011 年, 131 頁).
- 85) 「この際犬養君ならまらく納まらう 金ばかりで総裁には推せぬ 岡崎邦輔翁語る」(『東京朝日新聞』1929 年 10 月 8 日付). 実際, 犬養の健康問題は, 家族にとっても懸念材料ではあった. それまでほとんどメディアに現れない犬養の妻の千代は, 「今までは暇があると信州富士見に行つて養生していましたがこれからは忙しくなりますからさう休むわけにも行かなくなるので私は先生〔犬養〕の身体を一番心配してゐます, 何しろ今年七十五歳, 普通なら田舎に引込んで孫に肩でももませる頃ですのに

ね、これからはさうも行かず先生としても並大抵ではないでせう」（「気がかりな〔の〕は「先生」の健康 やさしい心遣ひを語る 犬養翁の老夫人」『東京朝日新聞』1929年10月9日付）と心配していたほどである。

- 86) 伊藤隆, 前掲書, 221頁の脚注⑩に掲載されている1964年6月25日に行われた内田の談話より.
- 87) 原田熊雄述『西園寺公と政局』別巻(岩波書店, 1956年)85頁.
- 88) 馬場恒吾『現代人物評論』(中央公論社, 1930年)381頁.
- 89) 同上書, 382-383頁.
- 90) 古島一雄, 前掲「政友会の総裁争ひ」950-951頁.
- 91) 「犬養翁就任を快諾す 『政党政治は一種の戦ひなり』と 今朝森幹事長と会見」(『東京朝日新聞』1929年10月9日付).
- 92) 内田信也, 前掲書『風雪五十年』119頁.
- 93) 高島米峰宛犬養毅書簡, 1929年9月30日付, 前掲書『犬養木堂書簡集』520頁.
- 94) 関弘矣宛犬養毅書簡, 1929年10月8日付, 同上書, 521頁.
- 95) 北六一郎宛犬養毅書簡, 1929年10月18日付, 同上書, 522-523頁.
- 96) 政友会有志宛犬養毅書簡, 1929年12月付日付不明, 同上書, 527頁.
- 97) 古島一雄, 前掲「政友会の総裁争ひ」, 951頁.
- 98) 同上, 948頁.
- 99) 犬養毅「議員辞任の挨拶」(『木堂雑誌』1925年7月)74頁.
- 100) 犬養道子『花々と星々と』(中央公論社, 1974年)190頁.

・本論文(Ⅰ)(Ⅱ)の引用文中のルビは原文のままであり、引用文中の〔 〕は筆者が付した。

・本論文(Ⅰ)(Ⅱ)で掲載した写真は、犬養木堂記念館所蔵である。また、同記念館の石川由希氏からいろいろご教示いただいたお陰でミスを防ぐことができた。末尾ながら心から感謝申し上げたい。

A thought on Tsuyoshi Inukai in his last years (Ⅱ)  
— Hakurinso, Sun Wen's coffin transfer ceremony and  
Seiyukai president —

Hideto TOKITOH

*College of Science and Industrial Technology  
Kurashiki University of Science and the Arts*

*2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan*

(Received October 1, 2015)

This paper tries to reveal the process in which Tsuyoshi Inukai was chosen by party executives as the president of Seiyukai to succeed Giichi Tanaka, who had led the party but died suddenly and created turmoil, and what Inukai thought during the process. At the same time, I have tried to understand why Inukai, right before the ascension to the presidency, attended the ceremony to transfer the coffin of Sun Wen, who Inukai had thought as an important partner in the Japan-China relations, another major political stage for him.

Enjoying the change of the seasons at a villa and spending more time with his grandchildren, Inukai was recovering from the political damage accumulated during his long career. But the situation around him was gradually getting raucous. That was because the political party he belonged to had made a series of mismanagement, causing the political influence of then president Giichi Tanaka to decline.

Then more people began to mention Inukai as a successor to Tanaka. And amid such a noisy environment, he was invited to the coffin transfer ceremony of Sun Wen, held by the Chinese Nationalist Party on June 1, 1929, in Nanjing. Accompanying him in this journey was Mitsuru Touyama, a man who was always in the same boat with Inukai on China issues, as Inukai himself testified. Both on the outbound and inbound routes, Inukai occasionally delivered speeches before Chinese people and executive members of the nationalist party about Eastern culture, China, and Japan-China relationship. This was an exhilarating experience for him in a sense.

In Japanese political circles, the Tanaka administration was steadily going on the road to collapse during the one-and-half-month Inukai's trip to China. The biggest reason for the cabinet's fall was that Tanaka falsely reported on the assassination of Zhang Zuolin and was reprimanded by the Emperor. The cabinet members all

resigned mainly due to this false report and the cabinet chief later died from a heart attack, quickly leading to the rise of Inukai as a candidate for Seiyukai president. The party executives who recommended Inukai as a candidate were worried that if they let Kizaburo Suzuki and Takejiro Tokonami, two strong leaders of the party, continue their power struggle as a successor to Tanaka, it could lead to internal strife and in the worst case scenario, it could break up the party. They also thought that given the old age of Inukai, there was no possibility of a long-term leader. In other words, they asked him to succeed Tanaka not as a long-time leader but as a “temporary president.”